

行為を自ら選ぶ。義仲滅亡の論理は諸本がそれぞれに描いている狼藉問題から法住寺殿攻撃の中に込められていると言つてよい。それを言葉に出して明らかにするのが基房の役のようだ（但し、源平闘諍録には基房の諫めが出てこない）。滅亡の理由は平家にもまさる「悪行」に置かれているが、延慶本などはその中心が「法皇ヲ悩シ奉リシ」事にあることを最も明白に打ち出していると言える。

「第四」は義仲の滅亡への経路を辿った巻と見做すことも出来、その論理（編著者の解釈）が背後に浮かんで来る構造になっている。このように脈絡をつけたからこそ、義仲討ち死にの場面だけを拡大したような「第五本」（巻第九）の部分が描けたのではないか。

注1 市古貞次・栃木孝惟「平家物語(二)本曾最後」(『解釈と鑑賞』昭42・6)には「政治的世界の蕩揺のうちに敗退する実在の義仲に即応しつつも、やはり物語は、また物語としての独自の考案を配したようである」とある。

注2 延慶本の目録の章段名によって示した。猶、特に巻をことわっていないものは「第四」中の章段である。

注3 阪口玄章『平家物語の説話的考察』(昭18・7)から。

注4 屋代本が欠巻の為、鎌倉本の名をあげて取り敢えず代表させた。

注5 義仲・行家の入京の時から頼朝の存在が意識されていたことは既に記した。

注6 注3に同じ。

注7 注1の「平家物語(二)本曾最後」には「実在した義仲の〈都〉における政治的才腕

の欠除を象徴させたもの」という捉え方が示されている。

注8 基房が忠告する前に「彼ヲ御使ニテ可止狼藉之由被仰ケレトモ本曾遠国ノ夷ト乍云無下ノヒタスラ物不覚アラ夷ニテ院宣ヲモ事トモセス散々ニ振舞ケレハ」とあって、後の二回の知康が使者となった時との関係がはっきりしない。

★

諍録は基房の諫めや解官の赦しなどには一切触れない。

このように、非当道系本や小野文庫本は捕縛・幽閉問題に力点を置いていのであるが、この問題は法皇の幽閉ということに関っているようである。法皇の幽閉については、「二十五木曾法住寺殿へ押寄事」「二十七宰相 脩憲出家シテ法皇御許へ参事」「三十六木曾依入道殿下御教訓ニ法皇ヲ奉宿事」「三十七法皇五条内裏ヨリ出サセ給テ大善大夫業忠カ宿所へ渡セ給事」に記されている。法皇の幽閉が基房の諫言で解かれたように描くのは非当道系本と小野文庫本とである（「稠シカリツル事」が一貫）。『吉記』に拠ると、十二月十日法皇の遷御は「五條殿有怪異之故云々」とのことである。五条殿の「怪異」については『玉葉』十二月八日条にも「當時御所五條殿恠異頻示 仍欲有遷御八條殿之處義仲不受之間 忽八幡御幸之儀出來了云々」とあり、当時の貴族の間では周知のことであったようだ。とすれば、基房の諫言に折れてとする非当道系本や小野文庫本が法皇の幽閉からの解放に虚構を設けていることは明らかだろう。「木曾依入道殿下御教訓ニ法皇ヲ奉宿事」の基房の諫めは、清盛を例にとつて、「夫力法皇ヲ悩シ奉シニヨリ蒙テ天責ヲ忽ニ滅ニキ 子孫又絶ハテヌ 恐モ可恐 敬モ可奉敬 只悪行ヲノミ好テ世ヲ持事ハ少キソ」ということであつた。この基房の言葉は、平家の滅亡についての編著者の解釈を代弁したもののようにも見える。こうした考え方が義仲に向かって述べられたということとは、この時点で、義仲が清盛にも劣らない「悪行」人になっていることを示している。同時に、次の巻における義仲の滅亡についての解釈をも示す

ことになっているのではないだろうか。

このように、法住寺合戦後の義仲の処置は、義仲の滅亡を視野にいれて、諸本それぞれに滅亡の合理化を試みていると言えよう（源平闘諍録の問題についてはここでは触れない）。

八

義仲の滅亡をどう理由付けているかという方向で関わりのある事件毎に目を通して来たのであるが、概況を纏めてこの稿を終えることにしたい。

「第四」の前半部、義仲達の勸賞、仕官問題あたりまでで印象的なことは、延慶本において、義仲の意向に合わせ、従おうとする法皇の姿勢が独自記事によって描かれていることである。それは、新しい覇者への期待を示す態度だったのではなからうか。一方、義仲が高倉宮の志を旗印にし、その功を重んじていることに就いて、批判的なものは見出せなかった。

しかし、巻の中程、「兵衛佐蒙征夷將軍宣旨事」から義仲は、入洛後の言動も含めて、頼朝の批判に晒されることになり、頼朝に対照させられる。このあたりから義仲に対する論調が明白に変わって来ている。

義仲の「悪行」が指摘され、平家に擬えて批判されるのは、やはり、洛中での源氏の狼藉——「替劣り」の声が高くなってからである。但し、狼藉については義仲本人の意志から行われた訳ではない旨の断りを非当道系本は載せる。法住寺合戦の理由を狼藉問題のこじれ、特に義仲と知康の反目に置くのは『平家物語』の虚構である。挑発された義仲は法皇への敵対

モアルカ」と言つて冷笑する。自分たち以上ではないかと言いたそうである。

一方、公朝から法住寺合戦の経緯を告げられた頼朝の言動は諸本によつて三種類に分かれる。非当道系本や屋代本などでは「木曾力悪行アラハ何度モ頼朝に被仰下テコソ被追討ヘキニ」と自ら追討を買つて出る「悪行」という表現は、「木曾八嶋へ内書ヲ送ル事」で（先述のように）、都の風聞の中に使われる。但し、延慶本・南都本だけ。又、小野文庫本には、平家の言葉に「あく行なをばいそうして」と出てくる。これに対し、覚一本などでは、特に義仲に対する頼朝の言動の記載はなく、逆に義仲が東国攻めを平家に呼びかける記事をすぐここに続けている。もう一種類は、直ちに軍兵を派遣する中院本等である。これらは批評を抜きにして、人物の言動、事態の展開の描出に寧ろ力を入れていると言えよう。

非当道系本のうち、延慶本・長門本・源平盛衰記には「兵衛佐山門へ牒状遣ス事」の章段があつて、その牒状の中で頼朝は「無程追ヒ平氏之跡ヲ専ラ逆ニス意ヲ去シ十一月十九日奉テ襲ヒ一院焼拂ヒ御所ヲ追捕ス卿相ヲ就中當山ノ座主并御弟子宮令其烈ナラ給云々叛逆之甚古今無比類者也」と義仲を指弾している。義仲は平氏と同類で、「叛逆之甚古今無比類者」だと言っているのである。法住寺殿攻撃は平清盛にも劣らない者として頼朝に追討される理由の第一となつたのである。

七

最後に法住寺合戦後の義仲の処置を取りあげる。問題になるのは、公卿・殿上人等の解官と法皇以下の幽閉である。

解官のことは「三十木曾公卿殿上人四十九人ヲ解官スル事」に記されている。この解官について、大多数の本は地の文で「平家ハ四十二人ヲ解官シタリシニ木曾ハ四十九人ヲ解官ス平家ノ悪行ニハ猶越タリケリ」と批評する。但し、南都本は解官の人数を記すだけで、この評語はない。又、中院本などはこの評語を前摂政基房の義仲への諫めの言葉とする。『玉葉』十一月二十九日条に拠ると、解官されたのは朝方から知康まで十七人、その外「衛府二十六人」の計四十三人である。『平家物語』が何によつて四十九人としたか不明だが、義仲の処置を「平家ノ悪行ニハ猶越タリケリ」という結論に向けて虚構したと見る方が宜さそうである。法住寺合戦後、義仲は平家にも勝る「古今無比類」の「悪行」人として位置付けられたのだ。

さて、解官された公卿・殿上人が赦されるのは基房の諫めのお蔭である。と、大方の『平家物語』は描いて行く。中院本などが、この面では最も明らかであるが、屋代本や覚一本なども、「悪行斗ニテハ代ヲ持事ハ無物ヲ被追籠タル人々ノ官共ヲ皆ユルセカシ」という基房の言葉に従つて、解官が赦されたことになっている。非当道系本や小野文庫本では、これに対し、屋代本などと殆んど同じ基房の言葉を載せるが、解官よりも法住寺合戦による捕縛・幽閉から解放されたと力点の違いを見せる（但し、源平闘

入京軍団の狼藉問題から法皇の御所法住寺殿を義仲が攻め破るという戦いへ拡大して行く。

ところで、『吉記』や『玉葉』によれば、十一月の緊張は頼朝の代官九郎義経の上洛をめぐってであった。使者も十日、十五日は澄憲法印で「頼朝使入京不可辭存」「於無勢者強不可相防」(『玉葉』)ということであり、直前の十七日も主典代景宗で「若事爲無實者速任勅命赴西國可討平氏 縦又乖院宣雖可防頼朝之使不申宣旨一身早可向也」(『玉葉』)ということである。入京軍団の狼藉問題は『玉葉』では義仲達の入京前後から九月にかけて頻出している問題であり、『平家物語』はそこだけを採用あげることによって義仲を批判的に描こうとしたものに違いない。

法住寺合戦への突入の仕方は非当道系本と当道系本で微妙に異なるところがある。

まず、非当道系本から見て行くことにする。洛中の狼藉のことで追討されるはめに陥った義仲は「二十三木曾可滅之由法皇御結構事」で、兵糧を徴収するのは止むを得ないと述べ、然るべき人々には配慮していると言って反発する(源平闘諍録には無いが)。「玉葉」九月五日の条には「義仲院御領已下併押領 日々陪増」という表現もある。「宮原へモ打入り大臣家へモ乱入テ狼藉ヲモセハコソ奇恠ナラメ」と義仲に言わせている非当道系本(源平闘諍録を除く)は多少手加減しているということであろうか。軍団の論理しか目にない義仲は「是ハ鼓メカ讒言也 不安者カナ 鼓女ヲ

打破テ捨ム」と知康への憤懣を露わにする。特に、延慶本は「高倉院第四宮可位付給之由事」で既に義仲の知康への不快感を記し、「知康力事已ニ禍ノ萌ス始メ此時ヨリ起レリ」と述べていた。先述のように義仲と知康との対立は歴史資料に出てこない(『玉葉』十一月七日程に「又有中言之者歟」という表現があるが、特に誰かを意識したものとも見えない)。このように、非当道系本は義仲と知康の対立に法住寺合戦の直接の動機を見ようとするのである。しかし、知康は法皇の使者であり、知康は法皇に直結している(『玉葉』治承五年正月七日程には「法皇近日第一近習也」とある)。樋口兼光・今井兼平達(南都本は名前を記さない)が諫めるけれども、義仲は「十善帝王ニテオワストテモ甲ヲヌキ弓ヲハツシテヲメ／＼ト降人ニ成ルヘシトハ覚ヘス」と言い放って、遂に法皇への敵対行為を決意する。

当道系本では、義仲が法皇の機嫌を損じて、軍兵が義仲から離れ出す。それを心配して今井が諫めるけれども、義仲は降人になる気がないことを述べ、次いで洛中の狼藉についても反論するという成り行きになっている(両足院本は法皇の感情を逆撫するような狼藉行為に出、そして只「兵衛佐力還リ聞ン所モアリ 尋常ニ討死セヨ」と言って法皇の御所を攻めることになっている)。

こうして合戦に突入し、義仲は御所法住寺殿を焼き、明雲・円慶を討ち取り、法皇以下を拘束する。

これらのことを聞いた平家は「此一門ヲ背テ源氏ノ世ニナシタレトモサ

東寺執行本を除く諸本に見られる。「平家の世」にもなかった狼藉として義仲達が批判される最初である。

又、神社の所領を侵犯し、寺を破壊したことに対し「釈尊在世之時提婆力化現モカクヤトソ覚シ」（後者についてだが）という感想も記されている。但し、この感想は延慶本と南都本にしかない。

入京軍団の狼藉は『玉葉』で確かめることが出来る。それに拠ると、「法皇天台山ニ登御座事」に最初に記される（非当道系本と小野文庫本で）ように、平家の都落ち直後の七月二十七日から既に「士卒之狼藉」の表現が見られる。そして、「木曾都ニテ悪行振舞事」に描かれた状態は『玉葉』の九月三日の記事などが該当するようである。

源氏軍の狼藉に対して法皇は壱岐判官知康を使として狼藉を鎮めるように命じる。最初の時（延慶本・長門本には編集の不手際がある^{（注8）}）、義仲は誰が狼藉を行っているか、実態が不明としながらも、狼藉を働いた者は断乎処罰すると返事している（「怠状」の中で「好猛悪之輩」を掬めたというのはその実行かもしれない）。これは延慶本・長門本にある。

しかし、京中の狼藉は止まないのです、再び知康が使者に立てられる（延慶本・長門本以外では初めてとなる）。義仲は知康を「万ノ人ニ被打タウカハラレタウカ」と恥ずかしめ、「義仲カ申タル旨ヲ院ニ申サレネハコソサ様ニ狼藉ヲスル／＼ト云沙汰有ルナレ」と言って叱る。後者は延慶本・長門本にしかない。

こうして、非当道系本では、悔しがる知康の勧めとその後も狼藉が止ま

ないことから、法皇が自ら義仲の追討を志すことになる。これに対し、当道系本（小野文庫本は非当道系本方で悔しきだけ）は知康の追討が必要という具申に法皇が同調してということになっている。

平家の時代にもなかったという狼藉が義仲追討に傾かせ、法住寺合戦に突入して行くのであるが、都から平家を追い落とした後の状況は延慶本・長門本・源平盛衰記・南都本では平家の耳に這入ることになっている。

木曾都へ打入テ在々所々ヲ追捕シテ貴賤上下ヲ悩シ佛物神物ヲ押領シテ非法悪行ナノメナラス
（「三十四木曾八嶋へ内書ヲ送ル事」）

入京軍団の狼藉は右のように世間から見られていたということになる。その首魁が義仲ということになっていたのである。

義仲が狼藉行為の責任者となるのは、入京軍団が義仲・行家に率られたものであった以上、『平家物語』諸本に共通することである。ところが、興味深いことに、源平闘諍録は「木曾必雖無^シ下知^{スルトモ}」という表現を入れて、わざわざ、義仲の命令で狼藉が行われた訳ではないことを断っている。又、延慶本・長門本・源平盛衰記は、物語の筋とは全く無関係に、狼藉が行われた理由を「加賀国井上次郎師方カ依^テ教訓ニ」とする一文の内幕話を差し挿んでいる。当道系本にはこのような表現は見出されない。このことは、源平闘諍録・延慶本・長門本・源平盛衰記の編著者が義仲を絶対的な悪人として済ますことが出来なかったことを物語るのではなからうか。

テ淺猿クヲカシカリケリ

この延慶本の導入・紹介の言葉は殆んどの非当道系本に見られるが、源平盛衰記だけは「立居ノ振舞ノ無骨サ」「詞ツキノ頑ナサ」という具体的表現を欠く。一方、当道系本のうち、屋代本・覚一本などは、源平盛衰記とは逆に、具体的表現だけがあつて、「堅固ノ田舎人」「アサマシクヲカシ」という言葉は（少なくとも冒頭部には）ない。また、東寺執行本や八坂本は「義仲参法住寺殿合戦事」で使われる「荒夷」という言葉を使つていて、前記の表現は全くない（両足院本は「荒夷」という表現さえ出てこない）。

八坂流の当道系本は説明を抜いて、直に逸話に当たつてもらおうという風であるが、導入部の長短、「立居ノ振舞ノ無骨サ」などの特定の表現の有無に関わりなく、この「木曾京都ニテ頑ナル振舞スル事」が「田舎人」の「アサマシクヲカシ」様を描いた滑稽絵巻であることは間違いない。

阪口玄章は先述のように早く、この章段を「反對對照説話」^(注6)として捉

え、「鎌倉の頼朝と比較してその無骨さを嘲笑しようといふのがこの説話の主題であつたとみるべきである。」と述べていた。阪口の論拠は「如何なれば、兵衛の佐は、かくこそゆゑ、しうおはせしか。當時都の守護して候はれける木曾義仲は、似も似ず悪しかりけり。」（同本所引）という表現である。このように明白に義仲を頼朝と比べる文章は八坂本・小野文庫本を除く、殆んどの当道系本にある。又、このような表現はないが、頼朝関係の記事に直接この章段を続けるものに延慶本・長門本・八坂本がある

（延慶本・長門本は「十七文覺ヲ使ニテ義朝ノ首取寄事」から）。こうして調べてみると、当道系本が最も「反對對照説話」として位置付けているようである。源平闘諍録や小野文庫本のように頼朝関係記事が近くに見えない本もある（源平盛衰記は平家追討についての短い記事を挿むだけ）が、しかし、阪口の見方は趣旨としては誤りとは言えない。「康定関東ヨリ歸洛シテ関東事語申事」の、義仲を意識している頼朝の印象が強烈だからである。空間的に離れていても、義仲は頼朝と自然と比べられてしまふのではないか（当道系本はそれを言葉に出して明らかにした訳だ）。

「木曾都ニテ頑ナル振舞スル事」は、畢竟、義仲が「堅固ノ田舎人」であつた為に、「都ノ守護」に長く留れそうもないことを示すことになつてい^(注7)ると言えよう。

五

次に都における入京軍団の狼藉について見てみる。入京軍団の狼藉は第三末「三十四法皇天台山ニ登御座事」（非当道系本と小野文庫本に）、第四「二十二木曾都ニテ悪行振舞事」に描かれている。これも内容は周知のことと思われるので、狼藉に対する批判や延慶本などの特殊な記事を見て済ますことにする。

狼藉を受けた庶民の嘆きは「平家の世には六波羅殿御一家と云てければ、恐をなしてこそありしか か様に目を合て食物着物をうはう事やはりし」（長門本）という言葉で紹介されている。この言葉は源平闘諍録、

先述のように「源氏共勸賞被行事」は淡々と義仲達の勸賞の次第を記していた。しかし、こうしてみると当然のことながら、国を嫌われたことは極めて苦々しいことであつた訳だ。そのことが頼朝の口から初めて出たことは、頼朝が法皇の代役（制裁者）を引き受けたようなものである。勿論、事情は使者、中原康定が義仲達への不満を伝えたのであつたろう。それに頼朝自身の彼等の栄達に対する危懼、苦々しさが重なっている筈である。「四宮踐祚有事」で延慶本・源平盛衰記は「尤頼朝之所存ヲ可思慮歟」という「人々」の批判を記していたが、頼朝は彼等の期待通りに振舞い出したのである。こうして、何者にも掣肘されないかに見えていた義仲の言動は遙かな監視者を得て、急に批判的に観察され出す。

ところで、延慶本・長門本・南都本・源平闘諍録において頼朝は義仲達を自分の使者と決め付けていた。これは、延慶本・長門本（源平闘諍録は欠巻）の第三末「七兵衛佐与木曾不和ニ成事」で義仲が「是モ又一方へ向モ且ハ御代官ニテコソ候へ」と折れて出たのを言質としたものようである（源平盛衰記も「義仲かくて候へは一方のかためにはたのみおほしめすへし」と同様な言い方をしているが、「御代官」という表現は使わない。猶、南都本には義仲の言葉がない。）。或いは、延慶本・長門本の系統には「兵衛佐与木曾不和ニ成事」で頼朝・義仲間に主従の決着が付いたと見る立場があつたのではないか。

さて、先の頼朝の批判の言葉は「三十三兵衛佐山門へ牒状遣ス事」の次の文言となって引き継がれる。

義仲等忽ニ忘朝敵之追討ヲ 先ツ申賜リ勸賞ヲ 次ニ押領国庄ヲ

右の記事の「忘朝敵之追討」の表現は源平闘諍録で頼朝が康貞に向かつて平家追討の件だけを述べているのと関係があるのかもしれない。一方「申賜リ勸賞」は源平闘諍録以外の本に記されている国を嫌つたことを主に指しているであろう。最後の「押領国庄」は延慶本・源平盛衰記の「四宮踐祚有事」の記事に、その後の法住寺合戦までのことが重ねられているようである。「兵衛佐山門へ牒状遣ス事」は延慶本・長門本・源平盛衰記にある。非当道系本のこれまでに見てきた義仲批判などは、いずれも、この頼朝の牒状とどこかで繋がっているようだ。

こうして、非当道系本を中心にしてだが、義仲等の入京と共に与えられて来た勸賞・任官は頼朝から追討の理由に挙げられて行つたのである。

四

次に都における義仲の言動の描かれ方を見てみることにする。これは、「十八木曾京都ニテ頑ナル振舞スル事」（覚一本の句題「猫間」）の章段にある。内容は周知のことと思われるので、編著者の態度、批評などを見て済ますことにしたい。

延慶本はこの章段の冒頭で次のように義仲を紹介してから、二つの逸話を記す。

木曾義仲都ノ守護ニテ有ケルカ ミメ形キヨケニテ吉男ニテ有ケレトモ
立居ノ振舞ノ無骨サ 物ナムト云タル詞ツキノ頑ナサ 堅固ノ田舎人ニ

て、勸賞が諮問されている。即ち、頼朝も同時に授賞するか、頼朝・義仲・行家の賞に差を設けるかが問われた。延慶本の場合も、授賞の時期、頼朝・行家等に与えるかの問題になっている。従って、三十日の公卿僉議と関係がありそうだが、僉議を載せない延慶本は、まず義仲に聴いたということ、法皇方の義仲への配慮を強調しようとしているのかもしれない。

次に、十日の勸賞は、『玉葉』十一日の条の「去夜聞書」によって史実であったことが確かめられる。しかし、『玉葉』に拠れば、勸賞は行われたが、除目は急に延期になったとのことである。又、十二日条には、行家が厚賞でないと言って、閉門して辞退した旨が記されている。『平家物語』には行家の不満は記されない。しかも、行家の忿怨の理由は「與義仲賞懸隔」の為此のことである。このあたりの義仲・行家の張り合いを『平家物語』は全く描いていない。十六日には「受領除目」のあったことが記されているが、具体的な内容は分らない。これ以上の記事は『玉葉』になく、勸賞・任官についての兼実の評も十六日条の「任人之體、殆可謂物狂、可悲々々」の外ない。

さて、嘆きが主の『玉葉』に対し『平家物語』は、先述の義仲・行家の勸賞・任官に就いて、批判の言葉を重ねて行く。その批判の様を辿ってみよう。

批判が最初に記されるのは「四宮踐祚有事」においてである。二人の院の昇殿に続けて、「此条雖非可驚官位俸祿已如存歟 奢レル心ハ人トシテ皆存セル事ナレトモ今稱^{シテ}勲功^ト日々重疊ス 尤頼朝之所存ヲ可思慮歟ト

ソ人々申アフレケル」と記している。「官位俸祿已如存歟」と言っても平家一門の榮華に比べれば微々たるものである。しかし、入京して以来、「稱^{シテ}勲功^ト日々重疊ス」という勢いには危惧を感じさせるものがあつたのであろう。「人々」は「頼朝之所存」を挙げて、官位俸祿の重疊を批判したというのである。

このように、延慶本・源平盛衰記は、官位俸祿の重疊を危ぶむ人々を描いて、後述の頼朝の対応を先取りするのである。^(注5)同時に、又、義仲・行家の「奢レル心」も指摘しておきたかったのかもしれない。

その頼朝が法皇の使者、中原康定を前にしてはつきりと義仲・行家を批判するのが「十六康定関東ヨリ歸洛シテ関東事語申事」である。即ち、義仲・行家は頼朝の使に過ぎず、平家は頼朝の威に怖れて都落ちした訳であつたのに、二人が自分の高名顔に恩賞に預り、その上、国を嫌つたというのは怪しからぬと頼朝は公言したのだ。

右は延慶本・長門本・南都本の頼朝の返事であるが、諸本を見渡すと、『源平闘諍録』（以下、『』を付けない）のみ義仲・行家は頼朝の代官なので二人に命じて平家を討たせよとだけ述べて義仲・行家批判がないのに対し、源平盛衰記や当道系本は義仲・行家は頼朝が使いという言葉は欠くかわり、頼朝の威により平家が都落ちした云々以下の義仲・行家批判は延慶本と同内容のものを載せる。言わば、延慶本・長門本・南都本は源平闘諍録の表現（但し、二人に平家を討たせよという意向を省いた）と源平盛衰記・当道系本のそれとを綴り合わせた恰好になっているのである。

「出家人ノ還俗シタルハイカ、位ニハ即ムスル」と述べたということが記されている。或いは、北陸宮の還俗宮であったことが大きな支障だったのではないかと考えられるのであるが、この部分が義仲の推挙事件とどう係わるのか はっきりしない。延慶本・源平盛衰記以外では全くの仮定の下に論議が展開されるのであるが、時忠（当道系本による）が、「出家の宮をばいかゝ位にはつけたてまつるべき」という俗見を博識でもって論破しているのを読むと、暗に北陸宮がその理由で退けられたことを諷しているのではないかという気もする。

このように還俗宮であったことは推挙事件と全く関係のない話であるとも言い切れないのである。諸本「高倉宮ノ御子達」で「還俗ノ宮」と呼ばれたことを記すが、覚一本・鎌倉本などの殆んど^(注4)の当道系本が出家についても「重秀が御出家せさせ奉り」（覚一本）と明白に記すのに、延慶本・源平盛衰記は元服しか具体的に記さない。当道系本は義仲北陸宮推挙事件を作品中に記していないけれども、「名虎」（覚一本）の件の論議で、それが「還俗の宮」で立ち消えになったことを匂わしているのかも知れない。

延慶本・源平盛衰記の場合は、右に述べて来た理由の外に、八月五日に決定済みのことを十四日になって義仲が異議を申し出ても証文の出し遅れで、体宜く手続きの問題で見殺しにされたということなのかもしれない。

延慶本・源平盛衰記の北陸宮関係記事は統一を欠いて居り、複数の資料、文脈が並べ置かれているという風である。只、いずれにしても、この

件を以て義仲を批判する姿勢は『平家物語』にないと言えよう。

三

次に、勸賞、任官問題を見てみることにしよう。

先ず、関係記事を辿れば次のようになる。

「高倉院第四宮可位付給之由事」に、泰経が義仲を召して、勸賞についての所存を内々に聴いたということが記されている。ここは延慶本だけにある。

「四源氏共勸賞被行事」に、十日に小除目が行われて、義仲が左馬頭兼越後守、行家が備後守に任ぜられた、しかし、二人とも国を嫌ったので、十六日の除目で、義仲は伊与に、行家は備前に改められたことが記されている。ここは、諸本殆んど変わらない。

「四宮踐祚有事」に、十八日に平家没官の所領等が分け与えられたことが記されている。即ち、義仲に百四十余箇所、行家に九十箇所が与えられた。行家が細分化を希望したが、義仲は自分のところで善処すると答えた。又、この日、二人共、院の昇殿を許された。ここは、延慶本と源平盛衰記だけにあり、両本は殆んど同文である。

右の勸賞、任官に関することはいくらか『玉葉』で確かめることができる。

先ず、泰経が勸賞についての義仲の希望を聴いたということだが、これについての記載はない。『玉葉』に拠れば、七月三十日に公卿僉議があつ

安徳天皇の弟宮はそれほど尊崇すべきものとも見えないという旨であった。法皇は義仲の申し状を公卿に諮られたが、「非無其謂」というのが彼等の答えであった。

ということである。

この内容は『玉葉』の八月十四日の条と関係がある。『玉葉』によれば、義仲が「義兵之勲功」をあげて北陸宮の即位を申し出たのは、この日、泰経に対してだったようである。法皇は、義仲と「親昵」の俊堯僧正を使者として説得したのだが、義仲は、源氏等の容喙すべきことではないとしながらも、高倉宮の至孝を述べて納得しなかったとのことである。

右の記事によれば、延慶本、源平盛衰記は

1 俊堯僧正が説得の為に向かったということを示している。従って、北陸宮に執着して、「此上事在勅定」と言いながら容喙しようとする義仲の姿が出て来ない。

2 俊堯に伝えた義仲の言葉は、『玉葉』の泰経と俊堯への意見を結び付け、それに、安徳天皇の弟ということを加えたものになっている。

ということになる。右のうち、義仲の執着振りが出ていないというのは大事な点と思われる。『玉葉』によれば、十八日、二回目の卜筮が行われ（三宮、四宮の順序が逆転）、北陸宮が「始終不快」と出た事が伝えられたが、義仲はなお納得せず、郎従と相談すると言ったという。このように、『玉葉』と比べてみた時浮き彫りになるのは、延慶本・源平盛衰記が北陸宮に執着する義仲の姿を描こうとしなかったことであろう。

この義仲の言動の改変は、義仲の申し状に対する公卿の返事とも関わりがありそうである。『玉葉』十八日の記事に拠れば、北陸宮推挙を受けて、基房、基通、経宗、兼実が意見を聴かれている（兼実は欠席）。三人の意見は「北陸宮一切不可然」ということだったようである。『玉葉』には「非無其謂」という意見は全く見出されない。

右の状況から考えれば、延慶本・源平盛衰記は義仲が北陸宮を推挙したことを横事として捉える気は全くないようである。むしろ、彼が高倉宮の至孝を説いたのを立派な見識としては認めていると言わべきであろう。

さて、それはそれとして、延慶本も源平盛衰記も公卿の返事はその後に受け継がれず、すぐに「三惟高惟仁ノ位諍事」に続いている。「惟高惟仁ノ位諍事」は「帝王ノ御位ト申事ハトカク凡カ力申サムニ不可依 神明三宝御計ナレハ四宮ノ御事モカ、ルニコソ」という或る人の言葉で結ばれている。確かに「帝王ノ御位ト申事ハトカク凡カ力申サムニ不可依」というのはその通りであろう。しかし、「神明三宝御計」ということはどうも納得が行かない。「高倉院第四宮可位付給之由事」で描かれたのは法皇による世嗣の、人間的な認知ではないのか。「高倉院第四宮可位付給之由事」で「神明三宝御計」にあたることを探せば「御占」であろう。先の言葉は、公卿の「非無其謂」という返事の後に、その「御占」が行われたとでもいうのであろうか。『玉葉』の記すような「御占」の遣り直しを匂わしたものであろうか。編著者の意図がはつきりしていない。

さらに、「四宮踐祚有事」を見ると、大納言時忠や兵部少輔尹明などが

刺激したであろう。

義仲の内意が伝えられると、忠清父子は急遽、義仲の許に遣される。この「急」というのは義仲の気分を害したくないという法皇の配慮であろう。しかも、事は単なる預り主の変更に止りそうにない。そもそも忠清父子は「手ヲ束テ参リタリケレハ命ヲハ可被生ト聞」こえていたのである。ところが、義仲の許に遣わされることになってからの二人の前途を述べる編著者の筆は暗い。「降人ニナリタリトテモ助ルヘキニアラス」「都ニ留リテ今恥ヲサラスコソ無慙ナレ」。ここに暗示されているのは義仲の手による二人の処刑ということではないか。とすれば、叙述の背後において、法皇は、忠清達降人に関して面目を失われたことになろう。実際、忠清父子を預っていた能盛は、後、法住寺殿合戦で「痛手負テ万死一生」と伝えられている。この降人預りの変更を機に、義仲、能盛の間に確執が生じたことは間違いないまい。このように、義仲の内意は法皇に恥辱を与えることになったのだが、編著者はその点を表面に出したくないように見える。延慶本が描くのは、「平家ノ羽翼」としての忠清・忠綱の印象の強さであり、二人の判断の甘さである。『吉記』には忠清法師しか記されていないが、息子の忠綱も加えられると「平家ノ羽翼」という印象が強い。延慶本が忠綱を加えているのはその点で極めて意図的なのだ。主家を見捨てた者達を批判的に、己れの過去に怯える存在として描き、この時点では法皇が面目を失ったことなるだけ表面に出さないというのが編著者の意図と見える。

二

次に、北陸宮推挙事件を見てみることにしよう。

この問題については、例えば、

鎌倉の頼朝と比較してその無骨さを嘲笑しようといふのがこの説話の主題であったとみるべきである。これは勿論、義仲が或は皇儲問題に口をさしはさんだり、様々な亂暴を働いたりした爲の不人氣から生じた話であらう。

のような指摘^(注3)もあり、義仲の不人氣の原因となったともされるのであるが、『平家物語』はどう描いているのであろうか。

北陸宮に関する記事は、第二中「二十四高倉宮ノ御子達事」第四「平家一類百八十余人解官セラル、事」「九四宮踐祚有事」に出てくる。しかし、問題の推挙事件は「平家一類百八十余人解官セラル、事」にしか描かれない。これは、延慶本と『源平盛衰記』（以下、『』を付けない）だけに見られる記事で、殆んど同文と言ってよい（「高倉宮ノ御子達事」の関連部分も同文）。その内容を同様に略記すれば、

義仲が泰経に北陸宮推挙の旨を申し出ていたので、十四日、俊堯僧正を遣して、詳しく考えを聞かせた。義仲の言い振りは、皇儲のことに口出しすべきではないが、「軍士等力申状」を伝えるだけであるとのことであった。それによると、高倉宮は「法皇ノ勸慮ヲ休メ奉ムカ為ニ御命ヲウシナハレ」たこと、宮の親王宣をもって源氏が旗上げしたこと等から受禪に当たって配慮が必要ではないか、一方、「賊徒ノ為ニ被取籠」た

木曾義仲の滅亡の論理

——『平家物語』諸本の描出を追って——

橋 口 晋 作

寿永三（一一八四）年正月二十日に風雲児、木曾義仲は討ち死にをして果てた。彼の滅亡の原因をどこに求め、どのようにその過程を思い描くかは一般的な問題のように見えて、意外に個性的な問題のようである。^{（注一）}

ところで、『平家物語』は普通、巻第八から巻第九にかけて義仲の都入り、そして討ち死にを描いている。その際、『平家物語』は義仲の滅亡の原因をどこに求め、その経過をどのように描いたのであろうか。この問題は、既に論じ尽くされたことのように見えるが、『平家物語』諸本の状況、藤原兼実の日記『玉葉』との対応など、充分でない処もなくはない。本稿は右のような方向から非当道系本の延慶本を中心にして、その「第四」の巻（当道系本の巻第八に相当）に絞って考察するものである。

入京後の義仲の言動の一つ一つについて、『平家物語』諸本が彼の滅亡へ如何に結び付けているかを検討して行く というのが本稿の目的である

が、先ず延慶本にしか記されない降人預りの問題から見ていくことにしよう。

この問題は「^{（注二）}一高倉院第四宮可位付給之由事」「二平家一類百八十余人解官セラル、事」の二つの章段にわたって記されている。それらに拠って概略を記せば、

義仲が大藏卿泰経に内々に申し上げたことに降人を預けられなかったという不審があった。上総介忠清父子は能盛に、左衛門尉貞頼^{（ママ）}は源行家に預けられていたのである。八月七日、忠清父子は後白河法皇から急遽、義仲の許へ遣された。二人は降参したので、助命されるという話だったのだが。

という内容である。

この降人のことは『吉記』の寿永二年七月二十九日の条に相当する記事を見出すことが出来る。『吉記』の記事は降人達が播磨に着いたという風聞で、その後、京に這入って変更があったのかもしれないが、二十九日の条と延慶本の記事とを比べると、忠清の子、忠綱が記されていない、貞盛（延慶本では「貞頼」）の預り主が異なる、の相違が目につく。

『吉記』に拠れば、貞盛は兼毫法印の許に身を寄せていたということだが、それが義仲の叔父行家に変更されるとどうなるであろうか（貞盛と貞頼が別人で、延慶本が貞盛の例に替えて引き出したとしても同様）。『吉記』の記事と比べた時、延慶本の義仲の内意で浮き上がって来るのは義仲・行家の張り合いである（京に這入って変更されたのなら、実際、義仲を